

書籍名	俳句と暮らす	著者名	小川 軽舟
出版社名	中公新書	発行年月	2016年2月

今月は俳人と言われている人の日常生活、生き方を紹介します。

軽舟は俳人ですが、普通のサラリーマンをしながら俳句と暮らしています。学校を出て東京本社の金融機関に30年勤め、そこから鉄道会社に転出します。自宅は横浜、勤めは関西のために岡本に単身赴任しています。2度目の関西勤務です。

「レタス買えば毎朝レタスわが四月」（軽舟）

忙しい銀行マン時代に25歳で藤田湘子に入門します。師匠の湘子は国鉄広報部のサラリーマン、定年を待たずに54歳で退職、専業俳人になった、勇気ある人です。

「鯉老いて真中を行く秋の暮」（湘子）これからは人生の真中を行くのだという決意の一句です。

俳句で食っていけるのか？ まず困難です。大方の俳人は仕事を持って生活しています。

著名な俳人、金子兜太はトク島で終戦を迎え、昭和21年に復員、翌年日本銀行に復職します。サラリーマン生活は失意に満ちたものでしたが、55歳の定年まで日銀に勤めました。

軽舟は単身赴任の期間中、月に2回週末に帰り、土曜、日曜は句会に出席します。日曜の夜は横浜の自宅で夕食、新幹線で夜更けに神戸に戻る、そんな多忙な単身赴任を続けています。

「遠ざかる町に家族や立葵」「母の日の妻をねぎらう箸二膳」（軽舟）

44歳の時に師匠の湘子が79歳で亡くなり、軽舟は師から後を託されます。サラリーマンとしては働き盛り、俳句を生業にするには早すぎます。サラリーマンを続けながら主宰を引き継ぎます。

妻は何も言いませんが、梨を剥いている、その手元は「単身赴任、御苦労さま。大変だけど、子供が大きくなるまで頑張る」と妻が無言で語っていました。

私の手元に所属している結社から「俳句雑誌」が届きます。毎月のように亡くなられた方への追悼文と、友人によって選ばれた十五句が掲載されています。亡くなる直前まで、闘病中も俳句を詠んでいたのでしょう。週末には多くの公共施設を借りて句会が催されています。学校でもない、会社でもない、コミュニティがそこにはあります。俳句を始めてその様な世界を初めて知りました。

「死ぬときは箸置くように草の花」（軽舟）

俳句を作るとは、生きることを楽しむことだと思っています

岩城



編集後記

2年程前に名張市の「まちの保健室」を知った、今回は、コミュニティデザイナー山崎亮さんが名張市の街のブランディングをラジオで話す内容が面白かったのでこちらにて共有します。名張市は住民が主体となり、街の魅力を発掘しプロモーションを進めているらしい?! まず名張市って?という方に説明します。三重県の西部に位置し、人口は約73,000人(大阪府で言うと泉大津市と同数程度、此花区と福島区の間)昭和40年以降に大規模な宅地開発、ベッドタウン化が進み、大阪方面へのアクセスがよく大阪への通勤者が多い。当時の移住者が高齢者になってきて、少子高齢化が進んできているという現状がある。

●まちの保健室とは...介護や子育て等の困りごとの相談窓口が地域包括支援センターとは別に15地区にあり、専門機関や地域の助け合いの輪につながる仕組み作りがあるため、安心して相談でき、いつでも助けてくれる人がいるという住民の安心感がある。この**地域共生こそが名張の魅力であり、未来につなげたい売りでもあった**、と山崎亮さん。

そこで、山崎さんは住民とワークショップを重ね、名張のブランドロゴを考えようと企画

他の地域で作られたブランドロゴを学ぶ勉強会で、自分たちで考えたキャッチコピー案を出す、

名付けて、**コピー100本ノック**を開催!最終的には、**ブランドロゴ総選挙**をし、選ばれたのが

←こちら。キーワードは「なんとかなる」、困りごとや悩み事があっても、大体なんとかなる!

市民の活動や人の好きが名張の特徴であると市民自身が再認識し、目立った特産品が

なくても、自分たちで街の魅力に気づき街の中で発信していく、自分たちが納得できる暮らしとそれを嘘なく、

発行所:ライフデザイン研究所 編集人 伊藤

実感を伴い発信!まだまだ成長途中の名張市。

